法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-27

学生活動サポート奨励金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン / Lifelong Learning and Career Studies
(巻 / Volume)
17
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
181
(終了ページ / End Page)
219
(発行年 / Year)
2020-03

学生活動サポート奨励金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

「学生活動サポートプログラム」は、キャリアデザイン学部の理念に基づき、キャリアデザイン学およびキャリアデザインの実践を推進するために、学生が主体となって企画・運営するさまざまな活動に対して助成を行う制度である。本年度は10件の申請があり、書類の記載上の瑕疵等により若干の減額が生じたケースが数件あったものの、すべてのプログラムが助成の対象として認められた。

申請された活動の内容は多岐にわたり、すべてのプログラムを合わせると、キャリアデザイン学部を構成する３つの領域、すなわち発達・教育キャリア、ビジネスキャリア、ライフキャリアのすべてが含まれるものとなった。以下に各々の活動の成果報告を掲載する。

学生たちには、このような活動を通して、「キャリア」や「キャリアデザイン」について考察や理解を深めていくこと、および、公的な助成金を活用して活動を企画・実行することの意義や責任を学ぶことを期待している。今後も多くの団体から、キャリアデザインの視点から、社会的に意義のある企画が生まれ、応募されることが望まれる。

なお、本プログラムの助成は、法政大学キャリアデザイン学会から支出されている。当学会の運営にご協力いただいているすべての方々に感謝を申し上げたい。

（学生サポート委員長　遠藤野ゆり）

企業とのマーケティングコラボレーション

代表者：酒井ゼミ　則久和樹

1　実施概要

A. 欧文印刷株式会社様とのマーケティングコラボレーション

欧文印刷株式会社の開発商品「nu board」の市場拡大に向けた新商品開発及び販売促進プロジェクト。

4月22日
欧文印刷株式会社　長島様　顔合わせ及び打ち合わせ

5月14日
nu board利用者ヒアリング調査。株式会社エス・エム・エス梅田様
nu board購入のきっかけ、使用感や改善ポイントなどのヒアリング調査を行った。

5月30日
欧文印刷株式会社　長島様　打ち合わせ

6月25日
欧文印刷株式会社　長島様　打ち合わせ

7月29日
欧文印刷株式会社　長島様　打ち合わせ

8月30日
欧文印刷株式会社　長島様　商品案提出

10月11日
欧文印刷株式会社　長島様　商品案提出

12月9日
欧文印刷株式会社　長島様　打ち合わせ

2月7日　予定
欧文印刷株式会社　最終商品案提出、商品化

B. 一般社団法人まめな様とのマーケティングコラボレーション

一般社団法人まめな様及びナオライ株式会社様と合同で、広島県の過疎化地域となっている久比の活性化の検討及び提案を行う。

※当初過疎化地域の研究として、千葉県館山市を対象として企画を行う予定（助成金の申し込みも館山市として提出済み）であった。しかし、2019年9月に千葉県を襲った台風により、宿泊予定施設及び合同予定の企業様が半壊となり、物理的に企画の実行が困難となったため、広島県久比地方での企画へ変更した（学生サポート委員会への変更申請及び変更の承認済み）。

5月28日
一般社団法人まめな　ナオライ株式会社
打ち合わせ
7月5日
一般社団法人まめな　打ち合わせ・ヒアリング
12月10日
一般社団法人まめな　打ち合わせ・ヒアリング

1月15日
一般社団法人まめな　打ち合わせ・ヒアリング

事前調査として、広島県の久比を活動拠点とする一般社団法人まめな及び、久比で栽培されたレモンを用いて日本酒などを販売するナオライ株式会社とのミーティングを行った。活動内容や広島県久比の現状のヒアリングを行い、酒井ゼミが合同で行うプロジェクトとして私たちに何ができるのかを擦り合わせた。

久比見学及び実地調査　予定
日程　2020年2月2日-2020年2月4日

観光マップ作製　予定
日程　2020年2月5日-2020年2月20日
現地調査でまだ見つけられていない久比の魅力を発見し、若者目線での久比の観光マップを作成し、提出する。

2　結果・意義・所見

A. 欧文印刷株式会社様とのマーケティングコラボレーション

欧文印刷株式会社の持ち運べるノート型ホワイトボード「nu　board」の新規顧客開拓を目的とし、ニーズの調査、新商品開発を行った。

〈プロジェクトの活動〉

街頭インタビューやwebアンケートによる認知度調査及び市場調査の結果から、新たに教育分野への参入を検討。家庭内での問題や口論になった際に活用できる「喧嘩仲裁ノート」を開発した。この商品により、家庭内でのコミュニケーションの活性化や子供の論理的思考力の強化を見込んでいる。

また、新商品及び既存のnu boardの認知度向上を図るため、商品公式のSNSを開設し、運用を行った。

〈活動の意義〉

これまではビジネスの現場での活用場面が多く、ターゲットは社会人となっていた。欧文印刷株式会社も想定していなかった家庭の教育分野にフォーカスし、市場分析結果と新商品案を提出したことは、これまでにない知見を社内に届けることができたと考えている。

SNSの運用では家庭の主婦以外にも幅広いアプローチに成功した。しかし、商品に関心を持っていただいたのは、「文房具好きのコレクター」が多く、本来のターゲットである主婦層から大きな支持を得られなかった。よりターゲットを意識した投稿内容の作成が今後は必要になる。

〈提言：今後nu　boardの売上を向上させるために〉

日々市場に新たな商品が登場し続け、商品の入れ替わりが激しい文房具市場において、商品及びブランドの認知度の確立は必須となる。より詳細なターゲティングを行い、一部の層からの支持を確立し、徐々にターゲットの範囲を広げていくことが得策だと考えられる。

また、SNS運用に関しては、投稿だけでは「文房具コレクター」の方にしか、顧客側からの検索にヒットしない。まだnu boardを認知していないターゲットには、費用対効果を検討したうえで広告配信など、認知度向上に向けた投資も視野に入れるべきであろう。

B. 一般社団法人まめな様とのマーケティングコラボレーション

過疎化による人口減少が課題になっている久比地方の地域活性化を目指す。久比地

方の理解とまだ発掘されていない魅力を探すことを目的として、久比へ実地調査を行った。

〈事前調査〉

久比へ実地調査を行う前の事前調査として、一般社団法人まめなと4度の打ち合わせ及びインタビューを行った。

一般社団法人まめなは久比地方の地域活性のため、介護サービスの充実、農業の機械化、特産品の開発・販売などに取り組んでいる。プロジェクトに参加するメンバーを常に集めているが、人材の不足がなかなか補えず、プロジェクトの進行が遅れる課題もある。

〈実地調査の活動（予定）〉

「広島県久比の魅力を肌で感じる」ことをテーマに久比の自然・人・観光地に触れ合う。

・自然

一般社団法人まめな様から、広島県久比で日本酒を取り扱っている株式会社ナオライ様を紹介していただき久比でのレモン1万本植林計画に参加。

・人

民宿を通して実際に久比に住む方と同じ生活を行い。インタビューや生活体験を行う

・観光地

私たち大学生の感じる魅力的な場所を見つけるために久比の散策を行う。

これらの情報をまとめ、若者目線で見つけた久比の観光マップを作成・提出する

〈想定できる活動の意義〉

久比地方について疎い第三者の立場で私たちが実地調査を行うことで、地元の方には当たり前となっている久比の魅力を発見することができる。また、私たちが観光マップを作成することで、私たちと同年代の大学生や20代の方も魅力に感じやすく、若者世代の観光客を集めるためには効率的だと考えられる。

また、実地調査の活動風景や観光マップをSNS等で発信することで、同世代の認知度向上も図ることができる。

地域産業活性化プロジェクト

代表者：酒井ゼミ　園田優子

1　実施概要

A. 東京都立川市の活性化プロジェクト

プロジェクトの目的は立川にある商店街の店舗の魅力を引き出すことを目標とし、以下の具体的な取り組みを行う。

a. 店舗撮影・取材　b. 動画撮影　c. SNS運用

現地調査及び打ち合わせ　日程 2019年4月26日～2020年2月20日

① 4月26日　立川市商店街復興組合連合会の方と打ち合わせ
② 6月14日　店舗取材･撮影･動画撮影　（立川南口商店街1軒・諏訪通り商店街4軒）
③ 6月21日　店舗取材・撮影　（立川南口商店街1軒・諏訪通り商店街3軒）
④ 7月5日　店舗取材･撮影･動画撮影　（すずらん商店街5軒・日活商店街1軒）
⑤ 7月18日　進捗報告会･店舗取材･撮影（すずらん商店街1軒）
⑥ 7月26日　店舗取材・撮影　（いろは通り商店街2軒・すずらん商店街1軒）
⑦ 8月9日　店舗取材・撮影　（高松町商店街1軒・高松大通り商店街2軒・シネマ通り商店街1軒）
⑧ 8月31日　店舗取材・撮影　（シネマ通り商店街2軒・すずらん商店街1軒）
⑨ 9月22日　店舗取材・撮影　（南富士商店会2軒・富士見商店街1軒）
⑩ 10月14日　店舗取材・撮影　（南富士商店会1軒・すずらん商店街1軒）
⑪ 10月18日　店舗取材・撮影　（こぶし通り商店街2軒・シネマ通り商店街1軒）
⑫ 10月28日　店舗取材・撮影　（こぶし通り商店街3軒・エルロード商店街1軒）
⑬ 11月22日　店舗取材・撮影・動画撮影（羽衣商店街1軒・あけぼの商店街1軒・シネマ商店街1軒・西立川商店街1軒）
⑭ 12月9日　店舗取材･撮影･動画撮影（南富士商店会1軒・柳通り商店会1軒・北大通り商店街2軒）
⑮ 12月27日　店舗取材・撮影　（柳通り商店会3軒・羽衣商店街1軒）
店舗取材は商店街の新たな魅力発見及びSNS投稿用の撮影を目的として訪問した。
⑯ 2月20日　報告書提出・発表　（予定）
立川市商店街復興組合連合会への報告書の提出。店舗調査を踏まえ、SNSを用いたデータを分析・考察し報告書を作成する。

※助成金申請時の想定より効率よく店舗取材を行えたため、訪問回数は16回となった。

B. 長野県飯田市の活性化プロジェクト

飯田市の伝統的工芸品である「飯田水引」の新たな活用方法の模索を通じ、飯田水引及び飯田市の活性化を目的としたプロジェクトである。

具体的な活動

a. 飯田水引を用いた新商品の開発　b. 新商品のワークショップの開催

ミーティング及びワークショップ　日程
2019年6月4日～2019年12月8日
①6月4日　打ち合わせ 飯田組合　岩原様
②9月1日　ワークショップ打ち合わせ　飯田組合　岩原様
打ち合わせでは水引を現代のライフスタイルに合わせて活用する新商品考案及びワークショップの概要決定、ポスターの作製などを行った。
③12月8日　飯田水引ワークショップ開催
ゼミ生考案の飯田水引を用いたイヤリング・ピアスを制作するワークショップを開催した。

飯田市現地調査（2回）
5月5日 -5月6日
6月30日 -7月1日
2度の訪問で、水引の製作現場の見学、水引の制作体験、現地職人へのインタビュー、水引博物館見学などを行った。

※現地調査での宿泊費が想定より安価に収まったため、助成金申請時より実際の使用金額が減額した。

2　結果・意義・所見

A. 東京都立川市の活性化

立川にある商店街の店舗に、取材として計16回訪問した。その訪問の中で店舗ごとの魅力をモノ・サービス・店長の3種類に分類して取材・撮影を行った。

〈ターゲットとSNSの活用について〉

「もっと若い人達に商店街を利用してほしい！」といった立川市商店街復興組合連合会の方々の声もあり、ターゲットは20代の若い層に設定した。そのため、20代が多く活用しているInstagramで投稿を行い、訪問した際に感じた店舗の魅力を3種類（モノ・サービス・店主）に分類した。投稿には、どんな内容なのかが瞬時にわかりやすいようにキャッチコピーを挿入し、可視化した。また、それらの投稿は魅力が伝わるように、写真の撮り方と文章を工夫した。

若い層にとってどんな商店街の魅力（モノ・サービス・店主）が印象に残り、どう魅力を伝えることがInstagram上で最適かを考察し、報告書を作成する。

〈Instagramでの投稿データ〉（2020年1月11日現在）
・投稿数
モノ（食べ物や店舗の売っている商品等）を紹介している投稿　12投稿
サービス（「ハッピーアワー」のような、その店舗が独自で行うキャンペーン等）10投稿
店主（人柄の素敵な店主等）　5投稿
・リーチ数（投稿を見たユーザー数）
1投稿によるリーチ数平均　モノ　332人
サービス　282人　　店主　270人

〈提言：SNSの活用した商店街の魅力を伝え方〉
1. 投稿画像による興味関心
視覚からの情報収集が行われるInstagramにおいて、モノがユーザーの目を引きやすいことが考えられる。
2. ハッシュタグ検索
検索者にヒットするハッシュタグの使い方がリーチ数にも関連していると考えられる。モノの投稿はサービスや店主の投稿以上に検索者がハッシュタグで検索している（例：#パンケーキ　など）ため、表示回数が多いと予想される。店主やサービスに関するハッシュタグは検索者が検索するワードと結びつけることが難しく興味関心があってもユーザーに届いていなかったことも考えられる。

〈所見〉

今回私たちは、「普段商店街を全く利用しない人は、どのような情報が届けば商店街に興味を持つだろうか」という考えの下、立川市を対象に調査を行い、行ってみないと分からない商店街の魅力を動画や写真を用いてSNS上で発信を行った。

投稿画像に対して「素敵なお店だ」や「実際にいってみたい」といったコメントも寄せられた。さらに、投稿画像のリーチ数の結果は8,162人へのリーチがあり多くの人の目に行き届いた。数字的結果としては、モノを紹介する投稿がよりリーチ数の高さに影響があったと言える。

結論としては、Instagram上で、多くのユーザーに届けるための、写真を用いた視覚的アプローチはモノ（商品）の画像を採用することが最も効果的であると考えられる。

しかし当調査を通し、私たちが当初想定していたよりもサービスや店主の投稿のリーチ数が高かったことより、情報を求めている、またはそれらに関心があるユーザーも一定数存在することが明らかとなった。そのため、サービスや店主の情報は受け手に届くまでの方法を再検討し、改善することでより効果的なアプローチがなせると期待できる。

B. 長野県飯田市の活性化プロジェクト

飯田水引組合と飯田市役所の方との協同で、長野県飯田市の伝統工芸品である飯田水引の再起を目的とした活動を行った。

現代のライフスタイルに合わせた新たな飯田水引の使用用途を開発し、再び認知度の向上を目指した。

プロジェクトの中で、飯田市に2度訪問した。1度目は、水引制作体験や現地の文化に触れるといった現地調査を行い、飯田水引に対する理解を深めた。

2度目の訪問は、一回目の訪問で感じた魅力をどのように発信していくかの議論を重ねた。

〈ターゲットの選定〉

ターゲットは以前の購買層として割合が少なかった20代に焦点を当て、新規顧客の獲得を目指した。20代の嗜好に合わせ、アクセサリー（イヤリング・ピアス）の制作体験を企画した。

〈ワークショップの結果〉

ワークショップの参加者は、1日で47人を集客することができた。開催後に行った、参加者へのアンケート調査から、ワークショップの体験後の感想として、「伝統工芸品を身近に感じられた」「楽しかった」「また作りたい」「可愛い」と言った声が上がった。「飯田水引を身近に感じられたか」という質問に対しては、参加者の100%が、「身近に感じられた」と回答した。

〈結果から得られた活動の意義〉

1度は衰退した商品（伝統工芸品）もその時代のライフスタイルに合った用途に商品の物語を変化させることで、新規顧客の獲得が望めることが証明された。また、参加者自身が手作りで商品を作成することで完成品への愛着も湧き、商品に“体験”という付加価値を付けることができた。

〈提言：伝統工芸品がいつの時代にも愛され続けるには〉

時代の変化に対応し、ライフスタイルに合わせた商品の用途や付加価値の変更をし続けることが必要である。今回のプロジェクトではイヤリングやピアスであったが、10年後に同じターゲットでワークショップを開催するのであれば、その時代のターゲットの趣向を読み取り、商品に落とし込まなければならない。

ブリッジワンスタディサポート

ブリッジワンスタディサポート　多久和佳

1　実施概要

【企画概要】

本活動は、本校キャリアデザイン学部の学生を中心として2015年度から開始され、都立一橋高等学校の定時制に通う生徒を対象に、一橋高校の昼休みと放課後の時間を利用し、生徒と雑談・相談にのることや学習支援を行っている。本活動の対象校である一橋高校は、通信制と定時制があり、生徒の学力のバラつき、家庭環境など生徒の背景は多様である。

そこで、本活動ではそのような多様な生徒に対して学習面からのアプローチ、雑談や相談によるアプローチから、生徒と関係を築き、居場所となれるような活動を目的としている。

【実施日】

毎週月～金曜日の昼休み（12:10～ 13:30）および放課後（16:15～ 17:25）
1学期 2019年 4月 24日～ 6月 28日
2学期 2019年 9月 10日～ 12月 2日
3学期 2020年 1月 9日～2月 26日実施予定

通常の活動の他

2019年 9月 27日、28日 一橋高校文化祭
2019年 8月 7日　1学期ふりかえり（一橋高校にて）
2019年 12月 18日､19日 2学期ふりかえり、打ち合わせ（本学にて）
2020年 3月 3日 ブリワン卒業式予定
2020年 3月 26日 3学期ふりかえり予定

【活動内容】

通常活動

本活動では、一橋高校の昼休みや放課後に、教室に訪れる高校生の要望に応じて、大学生が勉強を教えたり、相談や雑談をしたり、カードゲームをしたりして高校生とコミュニケーションをとったりしている。活動の最後に、生徒に付箋を渡し、「楽しかった」「疲れた」などその日の活動の感想を一言書いてもらう。加えて、その日のお題を出して、大学生とブリワンに参加してくれた高校生で付箋にイラストを描き、見せ合ったりすることもある。高校生に書いてもらった付箋は、ブリッジワンスタディサポート活動用のノートに貼っていく。一橋高校にて活動を終えると、参加した大学生は、その日関わった生徒の様子や聞いた話を Facebook のブリワンのグループにて投稿する。この Facebook のグループは、本活動に参加しているメンバーとブリワンの活動を担当してくださっている一橋高校の先生方、本学の教授のみが閲覧できるようになっている。

各学期のふりかえり

各学期の活動終了後に、一橋高校にてブリワン参加メンバー、本活動に携わっている一橋高校の先生方、本学の教員によって行う。各学期で関わった生徒について感じたことや考えたこと、各学期の反省点・改善点について話し合う。そこで得られた内容をもとに次学期に対応できるようにして

いく。

今年度の活動では、卒業を迎える高校生が多く、卒業するにあたり進学や就職を控える生徒もおり、日々のストレスや多様な感情の変化がみられた。先生でも保護者でもない大学生が、高校生とのコミュニケーションを大事にし、1人1人の感情を考え活動してきたからこそ、高校生の些細な変化にも気づくことができた。加えて、Facebook の本活動のグループ、一橋高校の先生方へ共有することによって、1回の活動限りでなく対応していくことができた。

一方で、今年度の活動で参加してくれている大半の高校生が卒業していくため、来年度、新規参加の生徒勧誘についてどのように対応していくかということも挙げられた。これについては、3学期に行われるふりかえりにて考えていきたい。

文化祭

ブリワンの活動を学校内外に知ってもらう機会として、毎年1教室をお借りして企画を行っている。昨年は、ブリワンによく訪れてくれている女子生徒の提案によって、手作りの折り鶴のピアスやイヤリングなどを景品として宝探しゲームを行った。今年は、文房具や手作りミサンガを景品に、宝探しや手相占い等を行った。文化祭の準備から当日まで、大学生が主体となって運営するのではなく、大学生は高校生のサポート側にまわり高校生が中心になって運営することで、実際に高校生がやりたいことに取り組むことができる機会となっている。参加する大学生にとっても、高校生の新たな一面を発見できる貴重な機会である。文化祭当日は、幅広い年齢層の方が訪れ、大変盛り上がっていた。

【活動従事者】
光地優作、中村海友、吉田真之、上野萌、大久保遥、大澤菜々子、佐藤崇至、永野晏梨、俣野夏希、木枝春花、鈴木美空、笹生豪、清水禄、多久和佳、西井翔真、二瓶明日見、平賀真樹、福島和紗、阿久津明日香、小林裕稀、坂本萌々、高師桜子、高橋栞
以上23名

2　結果・意義・所見

本企画による結果を通して、4点発見があったため、以下はそれらについて述べていく。

【新規参加の生徒勧誘】

1点目に、今年度の活動の結果から新規参加の生徒勧誘についてである。

今年度をもって、ブリワンに主体として参加してくれている大半の高校生が一橋高校を卒業することになり、来年度は今までに参加してくれていた高校生がほぼいない状況になる。そこで、来年度も活動を続けていくためには、新規参加の生徒勧誘を行う必要がある。昨年度の活動では、9月12日、13日にホームルーム時間をいただき1年生の全クラスで、勧誘活動を行った。この勧誘活動によって、どのような大学生が活動に参加しているのか、どんな活動が行われているのかを大学生が高校生に向けて伝えることができた。高校生からも、「今度顔を出してみようかな」等の声が聞こえ、興味を持ってもらえたようであった。来年度の活動を見据えて、3学期の活動期間中に生徒勧誘を考える必要があるだろう。

加えて、今年度のふりかえりで生徒勧誘について、「昼休みの後半は、前半に参加してくれていた高校生が下校したり、授業へ行ったりと誰も来ない時間がある。その時間を利用して、なにか名目をつけて高校生に話しかけたら大体好意的に応じてくれるし、ブリッジワンスタディサポートの活動

の宣伝にもなるため、大学生が高校生に積極的に話しかけることが重要ではないか」という意見も挙げられた。前述した意見の活動を積極的に行う他、活動内容についてのチラシを配布したり、廊下の巡回や入室しやすい環境の整備を引き続き行うことで効果が上がるのではないか。

【一橋高校の先生方への情報発信】

2点目は、大学生から一橋高校の先生方への本活動に関する情報発信があまり行われていない現状についてである。

本活動では、大学生と本活動に参加してくれている高校生、ブリワンの活動に携わってくださっている一部の一橋高校の先生方としかコミュニケーションをとることができていない。多くの一橋高校の先生方とコミュニケーションがとることができていない状態であるため、本活動内容について詳細を知らない先生方もいると考えられる。

そこで、本活動に携わってくださっている一橋高校の先生方を通して可能であれば、一橋高校の先生方とお話しをさせていただく時間を設けたり、本活動についての説明用紙を手渡しで配布させていただいたりすること等を行うことで、この課題の解消につながっていくのではないかと考えられる。この課題が解消することによって、校内でも本活動を広めることができ、一橋高校の先生方が、教室内でも本活動について高校生と共有するきっかけにもなり、1点目に挙げた新規参加の生徒勧誘にもつながるのではないかと考えられる。3学期のふりかえりにて、他学生と共有を図りたい。

【高校生同士のコミュニケーション】

3点目は、高校生同士のコミュニケーションについてである。

前年度に引き続き、高校生間のコミュニケーションが活発に行われる様子がみられた。応募用紙にて記述したように、本活動では簡単なゲームや雑談などを通して学年クラス分け隔てなく高校生同士が交流できる場を設けている。その効果として、高校生のコミュニケーション能力が高まっていることがふりかえりで報告されている。昨年度でも、生徒同士のつながりの深さがみられたことが報告されている。今年度は、さらに、以前コミュニケーションをとることを避けていた高校生同士が、彼らなりにコミュニケーションをとる様子がみられた。

本活動が、高校生同士で新たな交友関係を構築する場、学校における「居場所」となっていることがわかった。クラスや学年が異なっていても、本活動が高校生にとって、1つのコミュニティつまり居場所として機能している。

【大学生の本活動の参加について】

4点目は、大学生の本活動の参加についてである。

現状として、本活動のシフトに大学生が1人しか入れていない日が大半であり、多い日で2、3人という状態がある。今年度の活動では、大学生と複数人の生徒で簡単なゲームや雑談をすることが多く、個別で大学生が高校生に学習支援を行うことは少なかった。

しかし、来年度も活動を続けることを考えると、大学生と個別で勉強や相談をしたい高校生がでてきた場合、大学生1人のシフトが大半である現状では、他の生徒とゲームや雑談等をしていると対応することが難しい。個別で応じてほしい高校生にとっては、最初は本活動を居場所と感じてくれていても、個別で応じてくれない状態が続くと、居場所としての役割を果たさなくなり、その生徒自身が本活動から遠のいてしまう可能性が高いと考えられる。

この問題を解消するためには、本活動に

おいて大学生が２人以上いる日にちを増やすことが考えられる。しかし、昨年度から本学の授業時間帯が変更になったこともあり、一橋高校の昼休みや放課後の時間帯に合わせて大学生が参加することが厳しいという現状もある。実際に、今年度活動を閉じざるを得ない日にちも出てきてしまった。

さらに、反省会にて「新しいメンバーも加わったため、ブリワンの活動の意味や大学生の役割について、共通認識を含め、改めて考える必要があるのではないか」という意見も挙げられたため、3学期のふりかえりにて検討したい。

リニア中央新幹線工事が与える大鹿村への影響に関する調査

代表者：金山ゼミ　笠原優樹

1　実施概要

今回の調査の目的は、長野県下伊那郡に存在する大鹿村において、リニア工事がもたらす村民の生活への影響を明らかにすることである。

金山ゼミでは毎年大鹿村を調査している。この大鹿村は歌舞伎、幻の塩などの形を問わず貴重かつ重要な文化が継承されている。しかし、現在この大鹿村の存続を脅かす要因として、JR 東海が牽引するリニア中央新幹線計画がある。このリニア計画では赤石山脈を経て名古屋市付近へ至る直線ルートである南アルプスルートを採用しているため、赤石山脈と伊那山地に挟まれている大鹿村は、リニア工事による多大な影響を受けている。さらに、リニア新幹線を作る上で南アルプスを通過するということは中央構造線を貫くということであり、これは前代未聞の試みでもあるため、どのような事態が起こるかが予測できない。このような先の見えない状況の中、未だに本格的な工事に着工していないにも関わらず、残土置き場問題や村内でリニアに対する意見が分かれているといった問題などが既に生じてしまっている。このように大鹿村は、地理的、社会的、歴史的、文化的な面から村の存続に関わる問題を抱えている大変興味深い地域であるため、既に調査を重ねており信頼を得ている金山ゼミとして調査を行った。

●日程　2019年4月29日（月）～5月1日（水）2泊3日

4月29日（月）　大鹿村中央構造線博物館にて施設見学
インタビュー調査
・旅館亭主　多田　聡さん 赤石荘にて

4月30日（火）インタビュー調査
・観光協会職員　山城　海人さん　道の駅 歌舞伎の里大鹿にて
・教育委員会役員　北村　尚幸さん　大鹿村公民館にて
・村会議員　齋藤　栄子さん　山の食堂するぎ農園にて
・村会議員　河本　明代さん　中央構造線博物館にて
・学芸員　河本　和朗さん　中央構造線博物館にて

5月1日（水）リニア中央新幹線工事現場見学

●分担　統括→笠原 優樹
会計→才木 真琴
連絡係→五月女 光成
LEE CHAERIN
記録・インタビュー→全員
報告書作成→全員

●報告書作成
2019年12月19日（木）
調査をふまえ、リニア新幹線工事が与える村への影響考察し、報告書としてまとめた。

報告書の印刷、製本を行った。

●報告書提出
2020年2月（中旬）　予定
調査でお世話になった大鹿村関係者に提出する。
郵送で提出する予定である。

●その他
フィールドワークの事前準備として、リニア新幹線をテーマとしたテキスト批評を行った。テキスト批評ではリニア新幹線を専門家はどのように考えているのかをゼミ生同士で意見を出し合うことで、理解を深めフィールドワークに臨んだ。
調査報告書の作成と同時に、発表用のパワーポイントの作成を行った。

2　結果・意義・所見

◆リニア新幹線は本当に必要なのか？
大鹿村という地域コミュニティに観点を置いた上で考えると、リニア新幹線は必要とは考えられない。しかし、すでに始まったリニア新幹線建設工事を大鹿村の一存で止めることは難しいだろう。そこで重要になるのは、今後大鹿村がリニア新幹線の問題とどう向き合うかであると考える。

◆大鹿村が受けている被害の具体的な現状とそれに対しての見解
大鹿村が受けている被害の具体的事例として旅館経営者の多田さんの具体例を挙げると、赤石荘の真下でトンネルの掘削工事を行っており、騒音の被害やそれに伴う宿泊客の減少の被害が出ている。
これらの問題は、リニア新幹線そのものが原因ではなく、リニア新幹線の建設工事に起因して発生している。そのため、今回の問題は建設工事が終了すると解決する部分は大きい。リニア新幹線そのものが悪いというのではなく、リニア新幹線の建設工事の仕方や段取りといった辺縁的部分に原因があるのではないかと思う。
その根拠として、インタビュー調査でもリニア新幹線そのものに関して嫌悪感を示す村民は、一部のリニア反対過激派を除いて少なかった。また、村民の被っている影響に関してもほとんどがリニア新幹線の建設工事に起因するものである。つまり、リニア新幹線そのものが大鹿村に与えている影響はさほど大きくなく、リニア新幹線の建設工事に原因があるのである。

◆今後、大鹿村が存続・発展していくために
上記でも述べたが、大鹿村はリニア新幹線の建設工事期間を耐え忍び、リニア新幹線の建設工事によって生じている問題改善がいち早くなされることが求められる。
そのための理想形として、村民とリニア新幹線建設工事の当事者との共存が必要であると考えている。
ゼミ生の視点で考えられる例として、工事を行う側と村民のコミュニケーションを図る機会があってもよいのではないかと思う。旅館経営者多田さん曰く、工事を行う側の人間は村民との衝突を避けるために、彼らとの余計なコミュニケーションを控えるようにしているという話がある。これによって村民側としては何もわからない状況下で工事が進行していくという事態が進んでいると考えられる。これを解消するために、村民側と工事をする側のコミュニケーションを図る機会、説明会などを多く設けるべきではないだろうか。

◆考察
上記のヒアリング調査から、リニア新幹線そのものに関して嫌悪感を示す村民は、

一部のリニア工事への反対派を除いて少なかった。また、村民の被っている影響に関してもほとんどがリニア新幹線の建設工事に起因するものである。つまり、リニア新幹線そのものが大鹿村に与えている影響はさほど大きくなく、リニア新幹線の建設工事に原因があると私たちは考えた。

◆結論

以上のことから本研究では、リニア中央新幹線の工事が大鹿村住民に与える影響を明らかにし、今後の大鹿村の展望として大鹿村の住民がリニア新幹線に影響されない対策を住民が主体的に考え、実践していくことが必要であると結論付けた。住民側と工事関係者のコミュニケーションを図る機会、説明会などを多く設けることで衝突を避け、リニア新幹線の建設工事期間を乗り越えることができるだろう。

◆最後に

今回私たちは、リニア新幹線工事の渦中にある大鹿村に調査に伺い、旅館経営者から観光協会、そして村会議員といった、様々な立場の人々にお話を伺った。大鹿村という同じ地域に住む人であっても、置かれた立場、状況、職業などによってリニアとその工事から与えられる影響が全く変わってくるという事実に驚かされた。

しかし、各自の口から出る言葉は異なるが、大鹿村に住む村民としてこの地域に対する愛を持ち、村についての今後を憂いているという部分は共通していると感じさせられた。また、都市型社会に住み生活している私たちゼミ生が、今の日本の中で稀有な存在になりつつある農村型社会に自ら足を踏み入れ、そこに住む人々の生の声、実際に工事が行われている生の工事現場、などその地域のリアルな現状を知ることができたのは非常に貴重な体験であった。

メディアを通した異文化交流学習の支援

代表者：坂本ゼミ　中原里美

1　実施概要

ユネスコの教育理念に基づき、学生が主体となって国内外の子どもたちのメディアを活用した異文化交流学習を支援することを目指した。

1, 国内小中高校におけるメディアを活用した異文化交流とキャリア教育の支援

・7月12日　or　11月8日法政女子高校 担当
スーパー・グローバル・ハイスクールの関連授業としての映像制作の授業支援班に分かれてそれぞれ動画を完成させ、上映会を行った。

2, 他大学との交流と映像制作支援、東日本大震災の被災地での取材

●福島合宿（中原，奥，中嶋，小島，貝崎，佐藤，菅野，田中，松岡）※全員が全日程参加のため以下省略
日程9月5日（木）～8日（日）（3泊4日）

9月6日
いわき市立四倉小学校にて映像制作の授業支援を行う
福島大学と合同で交流会をした後、法政大学、福島大学合同で「川内村で何を学ぶか」というテーマで意見交換会を行った。
9月7日
それぞれコースに分かれ活動した。
【Aコース】　中嶋
◎「歴史・文化・福祉・教育」班・「復興と地域づくり」班
【Bコース】　仁、松尾、美月
◎（株）あぶくま川内　取締役横山祐二さん講話
【Cコース】　佐藤、松岡、奥
◎2年生（自己プログラミング学習生）4名一区高田島の祭礼準備
【特別コース】　貝崎、小島、田中
◎高田島ヴィンヤードでブドウ栽培の手伝い、講話
活動後1区高田島祭礼準備、祭り運営後、遠藤守夫さん宅で三匹獅子舞について
9月8日
宮城県石巻市へ移動し、大川小学校見学・案内、日和山公園見学、がんばろう石巻・南浜つなぐ館を見学

2, 沖縄における貧困問題をテーマにした取材
・9月12日
株式会社沖縄タイムス社（担当：佐藤・貝崎）
社員（嘉数さん）へインタビュー
日本こどもみらい支援機構（担当：金島・松岡）
代表（武藤さん）にインタビュー
・9月13日
珊瑚舎スコーレ（担当：小島・菅野・中原）
代表（星野さん）へインタビュー
沖縄尚学高等学校（担当：奥・中嶋）
教員（上野さん）へインタビュー

3, 発展途上国であるカンボジアにおけるメ

ディアを活用した異文化交流とキャリア教育の支援

●カンボジア合宿（担当：中原，奥，小島，貝崎，田中，佐藤，松岡，菅野）
日程 12月 20日（木）～12月 28日（土）
21日トンレサップ湖見学
22日（佐藤，小島，菅野合流）
アンコールワット、アンコールトム見学
・ 12月 21日～ 28日　プノンペン
　メコン大学　学生と協働映像制作を 1週間に渡って行った
　キリングフィールド見学

⑴ 情報メディアとして最も相互理解が可能なツールである映像を用いて、協働で制作を行うことで言葉の壁を最小限にし、お互いの国の文化や考え方の違いについて理解を深める。
⑵ 日本にいては感じることのできない、カンボジアの現状や歴史がもたらした影響について深く考える。

活動②及び③は、インタビューや取材見学を各 5～ 10分程度で映像としてまとめた。

2　結果・意義・所見

1 ⑴ 東日本大震災の被災地での取材（スキル・結果）

被災地に実際に自分の足で訪れ、目で見て経験することで、被災地の偏見（風評被害）を見直すことにつながった。また、映像制作を行うことによって、現代のグローバル化、情報社会において大切な情報を批判的に見て選択し、発信する力が身に付いた。取材や編集作業を通し、様々なコンフリクトを乗り越える中で、就職活動や、社会にでる上で必要な問題解決能力や、主体的行動力が身に付いた。

⑵ 被災地研修とそれを映像化した体験について

「伝える」という作業は、起こった出来事を意味が通じるように並べ、相手に「わかってもらうこと」である。だから映像制作を行うことで、体験した出来事に対する捉え方が変わり、自分にとってどういう意味を持つのか、どんなものだったのか、認識することが出来るようになる。伝わり方は、前後関係を整理し、どんな順番で情報を出すのかで変化するから、自分が「どう伝えたいか」を明確にすることは映像制作において必要不可欠である。つまり、映像制作は、体験したことが自分にとってどんな意味を持つのかを考えるきっかけになる。体験をただの体験として終わらせるのではなく、「体験したことを捉え直し伝えること」を通して自分の中に落とし込むことに自分の体験を自分で作品に仕上げることの意味がある。

2 沖縄における貧困問題をテーマにした調査

⑴ 目的

本活動は、沖縄における子どもの貧困について調査することを目的として実施した。なぜならば、沖縄における子どもの貧困問題は本土とは異なった要因から起因するものがあるのに対し、本土では個人情報の問題や政治的背景におけるメディアによる情報操作などによってその実態が把握することが困難なため、実際に現地にて取材することが必要だと考えた。

⑵ 考察

沖縄の貧困には戦争孤児や米軍基地、本州との距離などの沖縄特有の構造が存在する。例えば、中心部を除いて公共交通機関が未整備であり、自家用車が主な交通手段であるが、車を所有してしまうと生活保護

の受給ができないことから、貧困率が全国1位であるにも関わらず生活保護受給者が少ない。また、食料品・日用品においては本土からの輸送費がかかり生活コストが高いことや、政府は米軍基地問題で手一杯であることなどの様々な原因が貧困を引き起こしている。

(3) 結論

沖縄県における子どもの貧困において、各家庭の貧困を引き起こしている要因は本土とは異なる部分が多くあり、沖縄特有の問題が挙げられた。しかし、貧困が世代間で連鎖し、そのしわ寄せが子どもの貧困を引き起こしている点に関しては本土と共通していると考えられた。

3 発展途上国であるカンボジアにおけるメディアを活用した異文化交流とキャリア教育の支援

(1) 異文化交流の重要性

映像制作では、異文化とのコニュニケーションの難しさを感じた。というのも字幕やアフレコの挿入作業など、細かいやりとりが必要なので他言語であることが壁になり、初めはなかなか意思疎通がスムーズにいかなかった。しかし、異文化間であっても一つの作品を制作するという過程の中で、自然と非言語コミュニケーションが生まれた。表情やジェスチャーなどを使って伝えたいことを表現し、相手の伝えたいこともくみ取ることができるようになったことで、協働映像制作のもたらす意義について体感した。異文化のため価値観の違いに触れることもあったが、それを受け入れ認め合うことが異文化理解を深めることになり、それと同時に自分たちの文化についても再認識するきっかけになることを学んだ。

(2) 映像制作が持つ意義

映像制作の意義は、制作過程を通じて自分自身が感じたことを言語化でき、そうすることで更に自分の考えを深められることであると考える。この映像の素材はすべて体験がベースとなっているため、ネットなどの情報では分からない部分、つまり自分の五感を使って感じたリアルな情報を取得し、そこで感じたことを言語化し映像化するのである。

シンプルなことではあるが、表面的な情報で学ぶのと、実際に現地を訪れ自分自身の身体で生に感じるのとでは大きく違う。だからこそ、オフラインの部分での情報収集は重要であり、それを言語化・映像化することでより自分の考　えを深めることができると考える。

・映像制作が持つ意義

映像制作の目的とは、「体験の言語化」と、「体験の映像化」である。「体験の言語化」の意義は、インタビューや見学などの体験を通して自分の感じたことを言葉にし、伝えることで、自分の中で漠然とした抽象的な感情や感覚が確かになものになり、自分の考えをさらに深めることにある。また、「体験の映像化」は、自分の体験をエピソード化する中で自分を捉え直し、視覚的に体験を捉え、考え直すことにある。例えば、キリングフィールドの映像制作は、キリングフィールドの、どの場所でどんな感情を抱き、何が重要であるのかについて考える機会となった。キリングフィールドで赤ちゃんの足を持って木に頭を打ち付けて殺した場所であるキリングツリーや、実際に虐殺に使われた鉈や斧など見て、この大虐殺の歴史は事実であるのだと実感したということを、動画制作を通して再認識した。さらに、映像制作と通じて、歴史を机上で学ぶだけではなく、実際に訪れ、理解することの重要性について強く感じた。もし、単にキリ

ングフィールドを訪れるだけであったら、「怖い」や「悲惨だ」などといった感情を体感するに過ぎず、自分が何を考えているのかについて考えることは無かった。編集作業の中で、体験をエピソード化することを通して、自分の考えや価値観を考え、深めることができるのである。

(3) カンボジア活動を通した意義，結論

このカンボジア研修を映像化する事を通して、言語の壁や、考え方の相違という困難な状況の中での協働映像制作では、日本では決して感じることができない達成感や充実感を感じる体験であった事を理解した。また、自分の価値観が当たり前でない事を体感し、異文化交流の重要性を再確認することができた。つまり、映像化が持つ意義とは、体験から得た考えや感じたものをエピソード化する編集作業を通して、自分がその体験から何を学び、何に意義を感じたのかを再確認する事であると言える。

「困り感」を抱える定時制高校生との学び
―授業の中で社会とつながるファシリテーション―

代表者：筒井ゼミ　戸田礼香（鈴木茉里菜も執筆）

1　実施概要

【企画概要】
本企画では、東京都立一橋定時制課程において、公民科におかれた学校設定科目である「シティズンシップ」の授業に学生がファシリテーターとして参加し、同校生徒の学びを支援するものである。

【実施期間】
(第1回) 2019年10月28日(月)、29日(火)
(第2回) 2019年11月11日(月)、12日(火)

【事前準備】

日　程	内　容	
8月20日（火）	ゼミ合宿内での企画内容の検討	一橋高校の教員2名が参加、今年度のクラスの現状把握と企画の大枠を話し合った
9月25日（水）	合同検討会第1回	一橋高校の教員の指導案を元に意見交換を行った。この授業では、第1回目の授業内容の再検討が課題となった。
10月23日（水）	合同検討会第2回	第1回と同様に一橋高校の教員の指導案を元に意見交換を行い、授業内容を当日使用する資料を用いて確認を行った。

【タイムテーブル】

	内　容	生徒の活動	ファシリテーターの動き	使用教材
導入 (5分)	前回の内容を振り返り参政権（基本的人権）及び納税（義務）について復習する	参政権の請願について、学習することを確認。権利が与えられていることとともに、国民の義務についても触れる。	教員が利害の調整が必要なことについて触れる。その間、自分の学校での課題にどのようなことがあったかを考えておく。	PC、 プロジェクター
展開① (10分)	本時の内容確認と一橋高校の現状の確認をする	一橋高校がどのような現状なのかを把握することで、生徒が具体的に考え、課題が発見できるようにする。生徒自身が発言できるような材料とする。	現在の一橋高校がどのような状況なのか、入試の募集倍率など具体的な数値をパワーポイントで示し、説明をする。具体的にどのようなことを考えれば良いのかを支援する。	
展開② (25分)	一橋高校の現状を考え、記録する	ふせんに一橋高校に足りないところと思われることを記録していく。	机間指導。止まっている生徒がいれば、言葉がけを行い作業が進むように配慮する。	ふせん、 タイマー
展開③ (15分)	個人が出した課題について、課題整理する	グループ内で話し合いながらKJ法を用いて、個人が書いたふせんを分類する。	机間指導。グループを巡回し、行き詰っているグループなどがあれば言葉がけを行い、作業が進むように配慮する。	模造紙、 プロッキー
展開④ (15分)	各グループで出てきた内容を発表し、全体でシェアする	模造紙を全体に示しながら、ポイントを発表。	生徒の発表をPCに入力、前方に生徒の意見を示す。	PC
展開⑤ (12分)	発表された内容に対して、共有できた課題	スクリーンに注目し、発表された内容から共通した課題やよかった点を見つける。	教員は生徒が挙げられやすいように言葉がけを行う。	
まとめ	本時のまとめ、意見の共有、次回の予告		次回に向けて、これからの課題を解決する方法を考える	

第1回の授業後に参加した学生、一橋高校教員、筒井で反省会を行った。反省会ではその授業の様子の共有、改善点を話し合い、第2回の授業で学生、教員双方が反省点を生かして取り組んだ。

【詳細】

・授業の記録として、昨年同様ビデオカメラを用いた。ただし、ゼミ担当教員が参加できなかった回についてはその限りではない。
・ふせんはかけた枚数の割合に比例して平常点に加えるとした。これにより、生徒のモチベーションが上がった生徒もいればそうでない生徒もいた。

2　結果・意義・所見

本企画は、東京都立一橋定時制課程において、2016年度開始の公民科におかれた学校設定科目「シティズンシップ」(自由選択)の授業に、ファシリテーターとして参加するというものでファシリテーターとして筒井ゼミ生が授業に参加するのは4度目である。

昨年度では、授業内での生徒たちの反応を見ると、グループでの話し合いでは一部の生徒は参加していなかったが、多くの生徒が参加していた。そしてグループによる発表では時間の関係で発表できなかったグループもあったが、発表をすることが実現した。そして、自分たちの課題に共感する人を集めるために、SNSを活用し、コメントを入れて拡散を試みたが、結果は良好ではなかったため工夫が必要と見られた。そこで今年度では昨年度の結果を踏まえ、授業では引き続きグループでの話し合いや発表を行い、解決策を生徒たちに考え、その解決策の実証に向けての課題を生徒たちに考えてもらった。これにより、生徒の考える力、話し合う力、まとめる力、プレゼンの力、発信力を高める、解決力、市民としての力を高めることを目的とした。また、昨年度は身近な課題を学校生活、仕事(アルバイト)、生活の3テーマに分けて挙げてもらったが、今年度では学校生活に絞り、一橋高校の入試の募集人数から見る現状や生徒たち目線からの現状の課題を挙げてもらい、集中的に考えやすくした。

今年度は企画実施の授業の前に弁護士による出張授業が行われたため、より一橋高校の生徒にとって「主権者としてどう考えるか?」というきっかけとなった。さらに、火曜日の授業では教育実習生が入った授業であったため、月曜日とは一風変わった授業となった。

以下では月曜日と火曜日に集められた結果と課題について書いていく。

【企画実施による結果と課題】

(月曜日)

・月曜日の授業では外国籍の生徒が数名おり、初めの方はグループに馴染めていなかったが、個人のふせんをまとめる際に名前をそのように読むのか、どのように書くのかなど名前の話題で場が盛り上がっており、その後の話し合いでも一緒に話し合うなど、まとまる力が強まった。ここで前述した授業の目的の一つを達成できたと考えられる。
・他のグループが発表している時は3グループ目で飽きてしまうことが多いが、今回はグループ数が3つと比較的少なかったため、スライドを凝視する生徒が多かった。しかし、来年度も同様とは限らないため、生徒たちが飽きないような工夫が必要である。
・話し合いでは、悪いところばかり出てしまい愚痴の言い合いみたいになってしまうが、学校の良い面も立て続けに出ており、悪い面だけでなく良い面に関しても触れられている。

・他のグループの発表の際に「確かに」「わかる」などの共感する言葉が多かった。共感する人がいることで世論形成の足がかりになることが学習できたのではないかと考えられる。
・模造紙を用いてKJ法で個人のふせんをまとめた際、生徒たちの個性が引き出せおり、学生がどのような生徒たちなのか把握するきっかけとなった。
・全く発言しない生徒に対してどのように接するのか引き続き考える必要がある。

（火曜日）
・やる気のある生徒と、そうでない生徒の差が先生の話を聞いている段階からわかっていた。グループワークを始めると、机に顔を隠してしまい、他の生徒の集中力の妨げになっていた。すべての生徒を授業に参加させることは難しいが、他の生徒の妨げにならないようにどのようにすればよいか、対策を練る必要がある。
・一橋高校の応募倍率を説明した際に、数字だけでは読み取ることのできない生徒が多く存在していた。そのため、事前に倍率の導入をしておくなどの対策が必要であると考えられる。
・ファシリテーターが入力しながらスクリーンに投影していたため、誤字脱字があると指摘と共に笑いが生まれており、授業が楽しくなっていると感じた。またファシリテーターのことを考え、ゆっくり言ったり、何回か言ったりするなどの工夫が生徒から見られた。このことから、タイミングを計る力や、思いやりが培われた。
・途中で担当教員やファシリテーターの意見も入れることによって、生徒は驚きを抱きながらも新鮮さがありよい効果をもたらしているように見えた。また、担当教員と生徒の意見が同じであったため、生徒と教員の関係性の構築にもつながったと考えられる。
・積極的にファシリテーターとコミュニケーションをとってくれる生徒が多かった。そのため、休憩時間は様々なところから笑い声や話し声が聞こえ、大学生との交流を楽しんでいるように見えた。
・SNSのことなどが意見として出た際に、担当教員よりもファシリテーターのほうが知っていることが多かった。そのため、世代の近い大学生が入ることにより、グループワークが活性化していた。

【まとめ】

全体を通して、ファシリテーターと生徒の関係構築がよかったため、グループワークが活性化していた。また、身近である自身の高校を題材にしたため、検討がしやすかった。しかし、ファシリテーターの中には一橋高校に初めて行った学生もおり、生徒と学生の間で一橋高校における知識の差が見られた。そのため、学生はあらかじめ一橋高校についての状況を理解しておくべきだと考える。

この一橋高校は、定時制高校のなかでも編入や転入が多い。そのため、外国にルーツを持つ生徒が少なくない。昨年度のファシリテーションでは、パソコンを使用するという画期的な方法を生み出したが、ローマ字入力ができない生徒がいたため、生徒間で進捗状況が異なった。しかし今年度はパソコンなどの特別なスキルを必要とするものを使わず、かつ日本の状況について理解していなくてもわかる内容であったため、生徒が参加しやすい授業であった。

授業内容についてはとても良かったが反省点もある。1つ目は、生徒のやる気の引き出しである。今年度は月曜日も火曜日も両方ともやる気のある生徒が多かった。しかし、毎年度同じであるとは限らない。その

ため、大学生という普段はいない特別なツールを使い、生徒のやる気をどのように出せるかをより深く考える必要がある。2点目は、事前準備が不足していることである。せっかく生徒にとって楽しい授業を作っても、大学生がわからずサポートができないのでは元も子もない。そのため、高校教員との打ち合わせをより密にする必要がある。

離島の小、中学校における学習支援プログラム

代表者：遠藤ゼミ　藤原和

1　実施概要

東京都大島町の小・中学校にて計３日間の学習支援のボランティア活動を中心としたフィールドワーク調査を行い、調査参加者は各自報告書を作成した。なお、調査の対象となった教育機関は、大島町立さくら小学校、大島町立第二中学校である。

【準備について】
事前打ち合わせ（日程：2019年８月１日）
・ 参加者が集まり、役割分担を決めた上で、計３日間の調査計画を確認した。
・ 参加者それぞれの研究計画を立てた。一人一人がどのような視点を通して、児童や生徒と交流し、調査をするのか、また、大学生側が学習支援だけではなく、生徒や児童と関わる中でどのようなことをもたらすことができるのか、ということについて一人一人の考えを共有した。調査計画の例として、ある参加者は発達障害がある子の学習サポートについて興味を抱いていたため、小学校において学習に困難を見出す児童と、周りの児童との関わり方や、彼らがどのように発達障害がある児童に教えているのか、ということ調査を通して見出すことを述べていた。また、児童、生徒に、大学生が自分自身のキャリアを共有することを通して、彼らに将来における１つのロールモデルを提示することも達成すべき目的として挙げられた。

その他準備について（準備期間：2019年８月１日～８月26日）
・ フィールドワーク調査を実施するまでの間、参加者と指導教員が相互に連絡を取り合い、準備を進めた。
・ 参加者がそれぞれ調査する学校（大島町立さくら小学校、大島町立第二中学校のいずれか）を決定した。
・ 研究実施日における計画を再度確認し、計画の調整を数回にわたって行った。

【フィールドワーク調査】
実施日程:2019年８月27日～８月29日（計３日間）
・ 東京都大島町さくら小学校、東京都大島町立第二中学校を対象としたフィールドワーク調査の実施を計２日間にわたって行った。

８月27日
・ 参加者が現地にてフィールドワーク調査の準備及び最終確認を行った。

８月28日（調査１日目）
・ 調査参加者が準備期間に定めた大島町立さくら小学校、または大島町立第二中学校に別れ、それぞれ学習支援を中心としたフィールドワーク調査を行った。
・ 調査終了後、宿舎で調査の振り返りを行った。そこでは、調査を通して気になった児童､生徒の言動について共有した。また、調査を通して新たに気になった点があった学生は、調査計画を変更し、次の調査

では教師と児童、生徒との関わり方と特徴について調査することを述べていた。
・また、2日目の調査計画について確認した。

8月29日（調査2日目）
・1日目と同様に、参加者それぞれが小学校、中学校において調査を行なった。
・調査終了後、前日と同様に調査の振り返りを行なった。そこでは、調査で気になった点や、どのような事例を中心に報告書を執筆するのか、ということ参加者一人一人が共有した。ある大学生は、小学校で行われたパソコンの授業における教師と児童との関わりの事例と、その事例から教師がどのように関われば、児童の勉強に対するモチベーションを維持できるのか、ということに関して考察し、その事例と考察を報告書に執筆すると述べていた。

調査担当者
・東京都大島町立さくら小学校
4年 栗田侑果
4年 田嶋柚里
3年 俣野夏希
2年 西井翔真

・東京都大島町立第二中学校
4年 小川莉奈
3年 佐藤崇至
2年 佐藤健太
2年 多久和佳

【フィールドワーク調査後の活動】
報告書作成（作成期間：2019年8月27日～9月25日）
・参加者がフィールドワーク2日間の調査で得た事例や、その事例に基づく考察について執筆し、各自指導教員に提出した。報告書の例として、ある学生は小学校における教師と児童との関わり方に関する事例を詳細に記していた。そこから、教師の語り口調や児童の反応もとに、どのような教師の声かけや態度が、児童が勉強するにあたってより前向きな感情を見出せるのか、ということを考察している。

2　結果・意義・所見

1. 企画の概要

2019年8月27日から8月29日の間、離島に暮らす小学生、または中学生の生徒を対象にした、学習支援ボランティア活動を中心としたフィールドワーク調査を行なった。そしてフィールドワーク調査終了後、参加者各々が調査を通して気になった生徒の事例や、その事例に関する考察を報告書にまとめた。

調査対象校は大島町立さくら小学校と、大島町立第二中学校である。調査の参加者それぞれが希望する学校に行き、生徒への学習支援や授業見学を行った。小学校では、児童が各々自習している様子や、児童同士の関わりを観察した。それとともに、児童が分からない勉強内容を教え、小学生との交流を図った。また、28日は小学生高学年を対象としたパソコンの授業の見学を行い、そこでは児童にパソコン操作を教え、先生と児童との関わりや、先生の授業運営について見学した。29日は水泳の記録会が開催され、調査参加者は水泳記録会における会場の設営や、記録会中の児童のサポートを行った。また中学校では、学級や部活動における生徒の様子を観察し、夏期課題に取り組む児童に対し、適宜勉強のサポートを行った。加えて、校長先生と副校長先生にお時間をいただき、児童の皆さんの普段の様子や大島ならではの教育についてなど、我々大学生からの質問に答えていただいた。

今回の調査を通して、児童または生徒同

士の関係性や、先生との関わり方、子どもたちの学力、そして先生の授業運営について学ぶことができた。調査を通して得ることができた情報をもとに、各自が気になった子どもたちの事例を取り上げ、報告書を作成した。今後､今回作成した調査報告書が、大島をはじめとする離島の教育現場にいる指導者の方々の一助になることを期待する。以下に記すものは、フィールドワーク調査を通して得た事例と、事例に関する考察である。

2. 小学校での児童の様子

大学生が学習支援のボランティアを行った場所では、児童が夏休み課題をこなすために集まり、小学生同士で勉強を教え合っているところであった。彼らは静かに勉強をするのではなく、会話をしながら勉強をしていた。会話の内容は勉強以外に、児童の家の話や、彼らの趣味についても話されていた。ある児童が自身の家庭について話す際、他の児童は、話している子の家庭について深く知っているようだった。この児童同士の関わりから、多くの人々と深い関係性がある地域コミュニティの特色が窺える。あらゆることを話せるコミュニティの特性ゆえに、彼らはすぐに勉強を教え合える環境を生み出すことができ、学力の向上につなげることが可能であると考えられる。

また小学校では、8月28日に高学年の児童を対象としたパソコン教室が開かれていた。先生がワードの操作を教え、児童は先生が教えた操作を真似る。この流れを繰り返すことによって、最終的に児童がチラシを作成できるようになるという授業内容であった。授業が進行する中で、チラシを作り終えた児童が自由にレイアウトを考え、新しいチラシを作成していた。その中で数名の児童が先生の写真を使い、その写真を引き伸ばし、トリミングをした上で、ワードにコメントを打ち込み、面白いチラシを作成していた。授業後に児童が先生にそのチラシを見せると、先生は笑いながらチラシを見て、チラシが面白いこと、そして児童のワード操作におけるスキルを褒めていた。児童はこの先生の発言を聞き、嬉しそうに後にしていった。また、8月29日に行われた水泳記録会においても、先生がこまめに児童に声をかけ、その度に褒める場面が見られた。児童数が少ないことから、先生も一人一人の児童に目を配ることができ、児童のモチベーションを効率的に上げることが可能なのだろう。また、児童も先生が見てくれているという安心感から、自由に彼ら自身の意思を活かして様々なことを学べると考えられる。

3. 中学校での生徒の様子

大島町立第二中学校に在籍する児童の数は全体で70人ほどであり､その数は年々減っていっているとされる。そのため一学年の人数は20人ほどで、これほどの小規模学級は同じ東京都でも本土の学校ではなかなか見られない。それに加え、大島町立第二中学校は校舎の隣に位置する大島町立さくら小学校から進学してくる生徒がほとんどのため、9年間にわたってクラスを構成する人員はほぼ固定されている。それだけ少人数であるため、地域全体で子どもを見守る文化が芽生えていると、校長先生や副校長先生の話から伺えた。その地域特性を利用し、教職員の方々は、生徒たちと密なコミュニケーションを築いているといえる。授業や部活動の様子を伺っていても、先生から生徒に対して名前で呼ぶことが多く、またそれは生徒にとって担任の教師だけでなく、他学年を担当する先生でもそのようなコミュニケーションが見て取れた。

このような働きかけが起こる要因として、①在籍する生徒数が少ない②小学校が隣の

敷地にある③保護者も同じ先生に教わっている場合がある、という3つの要素が関連していると考察した。まず①について、先述した通り比較的生徒数の少ないこの学校では、教職員が個々に児童を把握しやすく、また生徒の様子や情報などが教職員間で共有しやすいと予想されるためである。次に②について、大島町立第二中学校に在籍する多くの生徒が、小学校時代を過ごすさくら小学校においても同様に少人数での教育がなされている。そのため、進学に際して小学校と中学校の教職員間で生徒に関する情報共有が行われやすく、また地域的背景から全くの初対面という状況が生まれにくいため、生徒と教師間での信頼関係の構築のハードルを下げていることが要因として挙げられる。最後に③について、校長先生曰く自分のかつて教え子の子どもが入学することや、自身の同級生の血縁が生徒として入学することもあるという。このため、一般的には教職員と保護者間の信頼関係は生徒の入学に際して一から構築されるが、大島町立第二中学校のように、継続的かつ地域的なつながりが強い場所では事前にその下地が形成されているため、その関係性の構築が容易であるといえる。

4. 今回の調査で明らかになったこと

今回、離島の小学校、中学校にフィールドワーク調査を行い、離島の環境が、児童や生徒と教師との関係性に大きく影響をもたらしていることが明らかになった。東京の本土では構築することのできない、彼らの関係性により、教師と密にコミュニケーションを取ることで、児童や生徒は学習意欲を維持することができると考えられる。今後も引き続き調査を行うことを通して、離島の教育機関における児童、生徒や教師の特性についてより深く研究することが目指される。

アートを通じたアウトプット力の向上及び その検証方法の構築を目指して

代表者：荒川ゼミ　平木賢典

1　実施概要

＜実施の背景＞

文部科学省は社会の変化を見据えて、子どもたちがこれから生きていくために必要な資質や能力について見直しを行い、およそ10年に1度、学校教育におけるカリキュラムを改訂している。詰め込み教育からゆとり教育を経て、さらに次世代へ向けて、2020年から「生きる力」をメインに据えた新学習指導要領の運用が公示された。これは、子どもたちが自立して社会に参画していくために、「人間力」として必要なものを改めて整理しようとする試みであり、より具体的には、1. 体験から感じ取ったことを表現する力（感性や想像力を生かす）、2. 情報を獲得し、思考し、表現する力（言語や情報を活用する）、3. 知識・技能を実生活で活用する力、4. 構想を立て、実践し、評価・改善する力（課題探究の技法を活用する）が、これからの学びに求められる能力とされている。

そこで私たちは、これら4点を土台として、「表現力」と「行動力（実行力）」の2つを主要なテーマとして絞り込み、特に「行動力」の育成に関しては、さまざまな先行研究の調査から、「自己肯定感」が重要であると結論づけた。自己肯定感とは、「自分の可能性を信じ自分はできるんだという自信をもち、肯定的に自己を認識すること」（藤本2006）であり、こうした意識を高めることが行動力につながっていくと考えたのである。以上を踏まえ、表現力と（自己肯定感を含めた）行動力を総合して、私たちは「アウトプット力」という言葉を設定し、音楽を通じてこの力を育成するための企画を立てて実施した。

＜企画の内容＞

企画の内容は、子どもたちとともに音楽を題材としたイベントを作り上げることを通して、彼らの「アウトプット力」を育むための実践的な方法を探ると同時に、その効果を客観的に検証する手法を構築するというものである。学習指導要領にしたがえば、小学校音楽科では、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成を目ざしている。この中で、表現や活動と生活や社会とのつながりが示されていることからも、先に挙げた「アウトプット力」の育成において、音楽が非常に有効な役割を果たすことが期待できると考えた。

より具体的には、キャンパスの近隣にある子どもの音楽教育のためのスタジオ「オトノアジト」との共同プロジェクトとして企画を進めた。オトノアジトは、従来の音楽教室のような楽器等の技術の向上にとどまらず、「アイディアマンを育てる」「自分の意思を形にする力を育てる」といった目標のもと、子どもたちに音楽以外にもさまざまなワークショップやイベント等を経験させることで、豊かな創造性を育むことを目ざしている。そのような方向性が荒川ゼ

ミの研究内容と合致していたことから、今回の共同プロジェクトに結びついた。

私たちはまず、オトノアジトの教室を通じて、企画に参加してくれる子どもたち（キッズスタッフ）を募り、集まった子どもたちとともに、ほぼ隔週の土曜日にキャンパス内の教室においてワークショップ形式でミーティングを重ねた。彼らとともに音楽イベントを作り上げていきながら、子どもたちの成長プロセスを観察し、音楽を介した学びの可能性を探った。その際私たちは、子どもたちとコミュニケーションを取りながら彼らのアイディアを引き出し、音楽イベントの実施に向けて内容を決めていく「イベント班」と、子どもたちと大学生の交流の様子を客観的に観察・記録することで、そこから見えてきた変化や気づきをゼミ内で共有し、子どもたちのポテンシャルの向上に関する理解を深めていく「研究班」とに分かれて活動を行った。各回のミーティングの概要は以下のとおりである。

2019年9月14日	キッズスタッフたちとのアイスブレイク
2019年9月28日	音楽イベントのテーマや使用する楽曲についての話し合い
2019年10月26日	合唱曲の選定や台本のセリフに関するロールプレイなど
2019年11月9日	ユニフォームのTシャツのデザインや台本の読み合わせなど
2019年11月30日	合唱の練習や配役決めなど
2019年12月7日	合唱の振付けや台本読み合わせなど
2019年12月21日	全体のリハーサルと当日の打ち合わせ
2019年12月26日	新宿区立角筈区民ホールにてイベント本番
2020年1月11日	キャンパス内にてフィードバックのためのミーティング

イベント班は、小学生のキッズスタッフたちだけで白紙の状態から企画を練り上げていくのは困難だと考え、予め下地を用意しておいた。つまり、子どもたちによる楽器を用いた簡単な劇を作る、という大まかな枠組みを考案しておいたのである。子どもたちがアイディアに行き詰まった際には、必要に応じて大学生から提案してサポートするという体制を作り、さらにはイベント会場の確保といった実務的な準備も別個に進めていった。

音楽イベントの内容については、子どもたちの意見を取り入れ、ゲームの世界を題材とした物語を劇の形式で進めることになった。ミーティングでは、劇中のセリフを子どもたち自身に考えてもらうワークを行ったり、本番で着用するおそろいのTシャツのデザインを考えてもらったりするなど、彼らのアイディアをできるだけ引き出せるよう工夫した。また授業のサブゼミの時間を活用して、劇中に組み込む楽器の演奏やダンス・パフォーマンスについて大学生のあいだで検討するとともに、台本の執筆や会場の下見といった裏方の作業も推し進めた。さらに、オトノアジトのスタッフの方たちとも相談し、ゲームの世界に入り込んだ子どもたちが伝説の剣を得て魔王を退治する、という劇のストーリーの合い間に、観客参加型の「リズムゲーム」や「クイズゲーム」なども盛り込むことになった。

一方、研究班は、子どもたちの変化や成長を客観的に測定するための方法について検討を重ねた。毎回のミーティング後に、子どもたちにその日の振り返りを口頭で発表してもらうとともに、アンケートを実施して彼らの意識の変化を探ることにした。しかしながら、後述するように、アンケートという手段では明確な結果を得ることができず、イベントの本番後に、子どもたちに対して個別のインタビュー調査を行うことで彼らの内面をより丁寧に探ることにした。

2　結果・意義・所見

＜ワークショップの結果＞

各回のミーティングの終わりにキッズスタッフに向けて実施したアンケートでは、「自分の考えや気持ちをいうことができた」「前と比べて発表するのが楽しいと感じる」「今日の目標を達成することができた」「自分から積極的に取り組みにかかわることができた」といった項目を設け、それぞれ5段階で評価してもらった。こうした質問を設定したのは、一種の簡易的なPDCAサイクルを通して、子どもたちがその日の活動を振り返り、自己肯定感がどのように変化したかを意識してもらうためであった。

しかし結果的に、このアンケートから「アウトプット力」の向上を読み取ることは困難であった。その理由として、まずアンケートにおける子どもたちの自己評価が最初から非常に高かったことが挙げられる。これに関しては、彼ら自身がもともとそのような傾向にあったからともいえるだろうが、それ以上に、アンケートの設問に工夫が必要であったと考えられる。たとえば、「自分の考えや気持ちをいうことができた」というごく大ざっぱな質問の代りに、「自分の考えをうまくまとめて言葉にできた」とか「自分の気持ちを相手にわかりやすく伝えようとした」といったように、より細かく丁寧な聞き方をすべきであったと思う。対象が小学4～6年生と幅があり、どの程度の言葉を選んで設問を作るかについてはいろいろと苦心したが、あとで述べるように、アンケートという形式そのものが、今回の研究テーマにおいてはあまり効果的でなかったかもしれない。また、子どもたちの変化を測定するために毎回同じスタイルのアンケートを実施したが、毎回のワークの内容によって設問を変えるといった対応もするべきだったように思う。

アンケートが機能しなかった理由としてもうひとつ挙げられるのが、おおよそ二週間に一度というペースでワークショップを行ったことである。あいだに約半月の時間が挟まれたことから、前回やったことに関する子どもたちの記憶が薄れてしまっていた可能性がある。そのため、彼らの変化や成長を目に見える形でとらえることができなかったと考える。これについての具体的な対応策としては、毎回のワークの冒頭で、前回の復習などを入れ込むべきであったと思う。

＜本番後のアンケートから＞

12月26日に角筈区民ホールでイベントの本番を行った際には、観客の方がたに、当日の演奏や曲目について訊ねるとともに、大学生と子どもたちのコラボレーションに関しても感想を書いていただいた。その結果、イベントそのものに対しては非常に好意的な評価が多く、さらに「大学生がもっと前面に出てもよかったのでは」とか、「もっと区の小学校を巻き込んでやってほしかった」など、より大がかりなイベントへの期待も寄せられた。今回は子どもたちの「表

現力」と「行動力」の向上をテーマにしていたため、われわれ大学生は基本的に裏方に回っていたが、今後は別のやり方もありうると感じた。

キッズスタッフたちも、ワークショップの段階では恥ずかしがったり、モジモジしたりしていたが、結局、当日は舞台上でのナレーションも含め、堂々と自分たちの役割を果たしてくれた。アンケート等による客観的な評価ではないものの、彼らのアウトプット力が向上したことは明らかであった。

＜インタビュー調査の結果＞

先述のとおり、ワークショップの際のアンケートでは子どもたちから正確な回答を得ることが難しかったため、研究班は議論を重ねた結果、子どもたちへのインタビューによる調査に切り替えた。年をまたいだ1月11日、キャンパス内でイベントの振り返りの機会をもった際に、子どもひとりに大学生二人のグループを作り、それぞれの子どもから丁寧に聞き取りを行った。

このインタビューからは、たとえば「学校以外にもつながりができて、前より積極的に発言するようになった（小4男子）」とか、「今まで（舞台で何かを）やるような機会がなかったから、やってみてよかった（小6男子）」「自分の力を発揮することができた（小6男子）」など、子どもたちの積極的な反応が多々見られた。このことから、ワークショップやイベントの成果を測定するには、アンケートという一方向の質問形式で彼らから答えを引き出すのではなく、対話というかたちで丁寧なフィードバックを行うなかで、個々の子どもの特性を把握し、彼らの考えや隠れた興味関心を汲み取っていくことが非常に有効であると感じた。今回は対象とした子どもの数も限られていたため、このようなフィードバックが容易であったが、もっと大人数の場合であっても、子どもたちが自分自身の自己肯定感を意識し、それを高めていくには、やはりその都度第三者が彼らと向き合って、丁寧に彼らの言葉を引き出していく必要があると考える。

＜全体の考察＞

今回のワークショップやイベント本番後のインタビュー調査からは、表現活動に対する子どもたちの　強い関心が見て取れた。実際、たとえば内閣府が平成21年度に実施した「文化に関する世論調査」でも、国の政策に望むこととして、子どもたちの文化芸術体験の充実がトップに挙がっている。このように、社会の側からも、子どもたちがより豊かな文化芸術を体験することが求められている。しかしながら現実には、学校教育における芸術科目の授業時間は減少の一途をたどっており、たとえば昭和24年の中学校三年間の美術の授業は210～315時間であるのに対して、平成5年は140～175時間（＋選択科目）、平成14年には115時間（＋選択教科）となっている。

むろん、限られた授業時間のカリキュラムのなかで、芸術科目を増やすことはきわめて難しいだろう。だが、学校の中だけでなく、そのほかの場所でも、子どもたちの文化芸術体験を充実させていくことは可能ではないだろうか。たとえば平成28年度の文化に関する世論調査では、学校における公演などの鑑賞体験の充実に加え、ホールや劇場、美術・博物館といった地域の文化施設における学習機会の充実や、お祭りなど、地域に密着した場での文化体験の充実なども指摘されている。このように、学校のみならず、自治体や地域コミュニティなど、世代間交流も期待できる多様な場において、子どもたちの表現の場を増やしていくことが今後の課題となるだろう。

現在学校の芸術科目の授業では、主として「作品制作（演奏）」と「鑑賞」のふたつに焦点が絞られている。しかし今回のように、子どもたちが自ら企画し、実行し、さらにフィードバックで第三者からの評価を得るという学びのスタイルは、彼らの自己肯定感を高め、アウトプット力を向上させていくうえでより効果的といえるのではないだろうか。

◎主要参考文献

学習指導要綱『生きる力』：文部科学省
www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm
藤本保（2006）『こころの問題辞典』平凡社
田島賢侍　奥住秀之（2013）「子どもの自尊感情・自己肯定感等についての定義及び尺度に関する文献検討」東京学芸大学情報委員会
オトノアジト HP　https://www.otonoagito.com
佐藤寛子（2018）「幼稚園教育要領における『豊かな感性』のみとりの観点」大学美術教育学会、第 50号

高岡向陵高校を対象としたキャリア支援ボランティア

代表者：遠藤ゼミ　大久保遥

1　実施概要

【企画概要】

本企画は、経済的貧困・地理的貧困を抱えている地方の高校生に対し、少しでも今後の進路の方向性を見出せるようになってほしいという願いから始まった。今回は、富山県高岡市に所在する私立高岡向陵高校を対象に企画を行う。

高校生がキャリアを考えるうえで、重視されているものは、学力や親などの外的な評価が挙げられる。地方に住む高校生には、地理的な要因もそれらに加えてあげられる。そうしたものを考慮した結果、「自分は何に興味があるのか」、「どうありたいのか」といった本来的な部分を考えないままキャリアを歩んでしまうという危険がある。その結果、高卒就職者の３年以内の離職率が高いことにもつながるのではないかと考えられる。

富山県は公立上位の傾向がある。応募用紙でも述べたが、今回訪問する高岡向陵高校は、卒業生の半分以上が就職を選択する。そしてそのほとんどが地元の企業に就職している。基礎学力の低さや貧困による金銭面の問題によって、就職を選択せざるを得ない生徒もいるという。首都圏と遠距離であること、高校生自身の学力が低いこと等を理由として、限られた進路に進むというキャリア形成は、地方特有のキャリアの問題だと考える。高校の先生方には、地元の企業への就職を選択するにしても、しっかりと自分のキャリアについて考えてほしいとの願いがある。

そこで、高校生に自分のキャリアについて考えられる場の提供、高校生の将来像の具体化を目的として行う。同時に、大学生が学生自身のこれまでの経験や知識振り返る機会の提供を目的として本企画を行う。

本企画の意義は、高校生が大学生との交流を通して自己と向き合い、自分のキャリアを考える機会を設けることである。大学生との交流を通し、高校生が自己を客観化できることに加え、自分の知らなかった進路の可能性に触れることで、視野が広がり、高校生一人一人にとって良いキャリア形成につながるだろう。進学を希望する生徒だけに限らず就職を希望する生徒にとっても、大学生は１つのキャリアモデルであり、交流によって幅広い進路選択の可能性を感じてもらえればよい。

【企画日程】

〈月１回の日帰りでの高校訪問〉

<u>第１回訪問</u>

日程：2020年１月29日

1月28日

現地移動

1月29日

私立高岡向陵高等学校にてボランティアの実施

（交流会、授業見学等の実施）

<u>第２回訪問</u>

日程：2020年２月14日

2月13日

現地移動
2月14日
私立高岡向陵高等学校にてボランティアの実施
(交流会、授業見学等の実施)

〈3月の3日間にわたる高校訪問〉
日程：2020年3月4日～6日
3月4日
現地移動
3月5日
私立高岡向陵高等学校にてボランティアの実施
(交流会、授業見学等の実施)
3月6日
私立高岡向陵高等学校にてボランティアの実施
(交流会、授業見学等の実施)

〈報告書の作成〉
日程：2020年3月下旬
現地でのボランティア活動を通して、得られたデータを、分析し・考察し報告書としてまとめる。
報告書作成にあたり、各自必要に応じて文献による調査も実施予定である。

【企画従事者】
大久保遥、田中渓太、俟野夏希、守田啓太郎、山下早苗、伊藤七虹、岩佐凪唯、笹生豪、多久和佳、龍田まりこ、西井翔真、日吉大樹、福島和紗

※計画では、9月～12月の訪問を予定していたが、高校との都合で急遽1月、2月、3月の訪問に変更となった。

2　結果・意義・所見

富山県高岡市の私立高岡向陵高校にて、大学生と高校生の交流会や授業補助などを通したボランティア活動を実施する。報告書は、現段階に実施した交流会の内容や高校生の変化などを踏まえて作成する。ここでは、本企画が未実施であるため、実施予定である内容と得られると考えられる知見について述べていく。

現地における訪問は、合計で3回実施する。内容としては、2020年1月から3月にかけて、計2回行う日帰りでの訪問と、2020年3月に大学の春季休業期間を利用した2日間にわたる訪問を1回の、計3回である。月1回の日帰りの訪問では、大まかな授業見学と補助、小規模な交流会を実施予定である。2日間にわたる訪問では、月1回の日帰りの訪問時よりも授業に密着することと、規模の大きい交流会の実施を予定している。いずれの訪問においても、授業や交流会などを通して、高校生とのかかわりを多く持つようにしている。

応募用紙も参考にしつつ、実施する交流会などの詳細を以下にまとめた。

私立高岡向陵高等学校について
まず、私立高岡向陵高校には「未来デザインコース」と「未来探求コース」の2種類のコースがあり、生徒がそれぞれ希望のコースを選んで進むことができる。未来デザインコースのせいとは就職希望者が多く、週6時間、科目を選択できる「キャリアアップ」によって教科学習をするか、「ミラクルプロジェクト」と呼ばれる独自の学習を行う。一方で、未来探求コースは国立難関校、私立難関校への進学を目指すコースであり、2学年時には「課題探求」と呼ばれる授業によって人文系課題と理系課題に分かれ、自分で課題を設定し、課題解決に向けて取り組んでいる。

富山県は公立上位の傾向にあり、私立高校は公立高校の滑り止めか、あるいは公立高校を受験しても合格する可能性が全くない生徒たちが専願するかのどちらかである。そのため、生徒たちは基本的に、受験における挫折経験や進路選択に諦め経験を抱いている状況である。生徒たちの学力不振の背景には、かなりの割合で家庭の貧困状況が見られる。中には、高校の学費を奨学金で賄い、卒業時点で100万円以上の借金を背負っている生徒が多数いる。

私立高岡向陵高校の生徒のキャリア形成

私立高岡向陵高校では、卒業生の半分以上が就職を選択し、ほとんどの生徒が地元の企業に就職をしている。基礎学力の低さや貧困による金銭面の問題によって、就職を選択せざるを得ない生徒もいる。このことから、地方の高校生には経済的・地理的な理由等によって、キャリア形成が固定化してしまっていると考えられる。また、「市首都圏から遠いから」、「学力が低いから」といった理由で、限られた進路に進むというキャリア形成は、地方独特のキャリアの問題である。高校の先生方も、地元の企業への就職を選択するにしても、しっかりと自分のキャリアについて考えてほしいと願っている。

大学生と高校生の交流会について

私立高岡向陵高校の生徒には上記のようなキャリアの問題点が考えられる。そこで私たちは大学生と高校生の交流会を企画した。具体的には、進路希望のクラスにおいて、クラスを4～5人のグループに分け、グループごとに大学生が1人ずつ付き、「大学とはこのような場所だ」、「大学生のリアルな1日」、「サークルやバイトの仕方」、「受験勉強の方法」など高校生が木になりそうなことを具体的に説明し、そのあと高校生から自由に質問を受ける。また、企画という型にはまった形だけでなく、訪問する大学生と高校生は自由にコミュニケーションがとれるようにする。

高校生と大学生では、授業を自由に選択できる点や、一日の時間の使い道を自分で自由に使える点など、大きく異なる点が多くある。そのため、高校生にとって「大学生」は遠い存在と捉えられがちで、イメージはなかなか想像しにくいと考えられる。交流会を行うことで、実際の大学生の日常生活について話を聞くことができ、イメージを具体的に考えられるようになるのではないかと考える。また、地方独特のキャリアの問題についても、東京の大学生と交流することは、将来を考えるよい刺激になるだろう。

大学生との交流会は、私立高岡向陵高校の生徒たちにとって自分の進路イメージを作る助けになるのではないないかと考える。

大学生にとっての交流会の意義

本企画に参加している大学生にとって、本企画は高校生がどのような問題・悩みを抱えているのかを知ることができる機会である。ゼミ活動や文献講読などを通して知った知識や学生自身の経験を、教育現場に当事者ではなく、第三者として入ることで、客観的に見つめ直すことができる。知識と現場の実情の相違を知ることで新たな問題意識も生じるのではないかと考える。

また、学校の先生が勉強・新路面においてどのように生徒と関わるサポートしているか学ぶことも可能である。教員志望や教育関係に携わりたいと考えている学生が、高岡向陵高校の特徴である個に合わせた授業方法を拝見できることは、4年時に教育実習を行うにあたり、有益なものとなるだろう。

今後の課題

2018年度の実施で課題となっていた、自分のキャリアを考える場の提供と学生自身のこれまでの経験や知識を振り返るという点に関しては、2019年度において改善がなされていると考えられる。一方、高校生の将来像の具体化に関しては、高校生の一人一人の取り組みとなってしまう部分があり、もう少し改善すべきであると考えられる。

人生100年時代のキャリア構築に関する ダイヤローグ・ラーニング

代表者：田中ゼミ　山口真菜美

1　実施概要

本ゼミナールでは、人生100年時代における「生き方と働き方」について理論的・実践的に学び、参加者とゲストスピーカーとのダイアローグ・ラーニングセッションを開催しました。実社会の最先端で活躍されているゲストを招聘し、現場で実際に起きていることをもとに、質問中心のセッションから深掘りしていった。

①時代の最先端で活躍されている方々をゲストスピーカーとして招聘する。セッションから実社会の流れを肌感覚で感じ、インプットする機会を作る。
②学生主体のワークショップを開催。ゲストスピーカーのお話から得たことや各個人がインターンシップなどの学外での学びをアウトプットする機会を作る。またゼミ外の学生、他学部・他大学の学生、本学部OB・OGが積極的に参加できるようにし、オープンに開催する。多様な考えを持った人々と交流することで、より多角的に視野を持つ。
③本企画は、インプットとアウトプットのバランスを取りながら、インタラクティブ・ラーニング形式で、これからの時代を生き抜く知識を身につけ、新たな時代に立ち向かっていく素養を身につける環境を作り出していくことを狙いとする。

上記三点を学習目標として、田中ゼミメンバーが中心となり、企画運営を行なった。

企画告知、ゲスト講師への連絡、当日のアテンド、司会進行までに従事した。学習目標に達成のため、創意工夫しながら、各回の講義を作り上げた。多くのゼミ生が企画運営に携わることにより、より深い学びを構築することに繋がった。

実施期日と内容

9月26日　組織形成について
（企画運営：山口真菜美　古田虎支郎　遠藤健太）

10月3日　タスクフォース
（企画運営：井上理実　　鹿子田有咲　小林都和）

10月10日　大学授業のあり方について
（企画運営：村田和佳音　鈴木渓太　清水歩）

10月17日　すごい準備
（企画運営：若田部遥　森山みなみ）
栗原　甚　日本テレビ放送網株式会社　プロデューサー

10月24日　仕事はもっと楽しくできる～大企業で働く若手社員の挑戦～
（企画運営：石松木実）
濱本　隆太　パナソニック株式会社
土井　雄介　トヨタ自動車株式会社
山本　将裕　東日本電信電話株式

会社

11月7日　人生を設計する未来会議
（企画運営：田村真土香　山口真菜美　鹿子田有咲）
若林郁未　Talknote 株式会社
日下部奈々　　ソフトバンクグループ株式会社

11月14日　X TECH
（企画運営：遠藤健太　古田虎支郎　石松木実）

11月21日　水道の民営化
（企画運営：中川凪　清水歩　熊井修也）

11月28日　第一線で働き続けるキャリア術
（企画運営：若田部遥　村田和佳音　岸本磨美　高橋ひとみ）
千葉　憲子　株式会社ガイアック
松田　紀子　株式会社ファンベースカンパニー

12月5日　政治の使いこなし方
（企画運営：森山みなみ　小林都和　松尾和哉）
古井　康介　株式会社 POTETO Media　古井　康介

12月12日　クラシックコンサートの新規顧客集客戦略
（企画運営：大久保滉太　大野駿介　森千晶）
西本　夏生　ピアニスト

通年　人生100年時代のキャリアシフトに関するインタラクティブ・ラーニング
岡村　紘子　（株）グローバル・カルテット

各回の企画運営担当者が準備段階から当日の運営まで全てを担った。

既に運営経験のある者が未経験の者にアドバイスを送るなど、より円滑で満足度の高い会とするために担当以外の者も含めた全員で毎回の講演を作り上げた。

2　結果・意義・所見

学年に関係なく、学生自身が各回の企画・運営まで主体的に取り組んだ。社会人のゲストの方々との連絡の取り方、円滑に進行するためにどうすべきなのか、などの考え抜く力を身につけることができた大きな経験だった。

この講演会を学生自身が企画することによって、連絡の取り方や、モデレートの仕方など、場を運営するためのするためのスキルが身についた。終了後に自分自身が振り返ることや、ゼミ生がフィードバックする機会を作った。

アポイントの取り方等、うまくいかない部分もあった。失敗も経験した。それをメンバーと共有することで、同じ失敗を繰り返さないように心がけた。

実際に経験することによって、自分に何が足りないかを知ることができ、今後の活動に生かしていくことができた。本活動を通して得た経験や知見は、大学卒業後に必要になる、社会人基礎力にもつながっていると考えている。

このプログラムに参加していただく、ゲスト講師の方は、男女や職種など、持つバックグラウンドが、なるべくバラバラになるように、招聘した。業界や職種が偏らないようにすることで、講演会に参加する、多くの人のキャリアのヒントとなるようにした。

そして、参加する人はキャリアデザイン学部生だけでなく、他大学生や、社会人の方にも参加してもらえるように、ポスターを作成し、Facebook などで、告知活動も積極的に行った。その結果、他大学生や、社会人の方にも多く参加していただけただけでなく、講演会が記事になることができた。講義式にインプットしていく、講演会だけではなく、「デザイン思考ワークショップ」などの自らがアウトプットしながら、学んでいくことによって、参加者が飽きずに、参加することができた。特に、本学部のOG・OB にも参加してもらえたことで、今までは、関わったことなかったが、その後も、話を聞いたりと、自分の参考にすることができた。かつ、新しいつながりを作ることができた。

また、ゲストの方々に「来てよかった」と言われることに満足感を感じ、またそう言われるように、企画運営を妥協せず、綿密に考え抜いた。これらは、ただ聴講するだけでは得られないプラスアルファの学びであると感じている。担当になったゼミメンバーそれぞれは、学生目線で他のメンバーのために分かりやすく構成を練ることを心がけた。その結果、ゼミ外でアウトプットできるまで各々が理解に落とし込むことができた。知識も含め、全てが大学卒業後の社会人基礎力にまでつながっていると考えている。

今年も、ゼミメンバーだけでなく、他のゼミ生、他学部、他大学、高校生から社会人まで、より多くの方に参加頂き、運営をしていくことが出来た。所属に関わらず、何かを学び取ろうという点において壁はなく、年齢の幅を超えて学ぶことが出来た。自分たちのコミュニティではなかった価値観を教えてくれるなど交流の範囲が広がった。今年は特にグループディスカッションの機会を多く取ったため、決められた短時間の間に、前述したような様々なバックグラウンドの方々と、一定の成果を挙げることが求められた。運営全体を見るメンバーだけではなく、各グループ内でも個々人が結果を出す術を試行錯誤したことも大きな学びがあったように思える。

招聘するゲストについては、様々な分野で活躍されている方をお招きし、性別、職種等異なる方にお声掛けするよう心がけた。バックグランドの異なる多種多様な方の生きた経験、考えを聞くことで、学生だけでは知ることのできない社会の広さや奥深さを学ぶことが出来、また新たな価値観を見出した。それと同時に、講演会に参加する多くの人のキャリアのヒントとなるようにした。その中で、役職、企業、経験の全く異なる方々に共通していることがあった。それはゲストの方全員が、挑戦し続け、それを楽しんでいたことだった。あるゲストの方から学生に対してこんな言葉を頂いたことがあった。「好きなことだけをしたいというのは、誰しもが思い描く理想であるが、まだ経験、知識共に薄い学生は、食わず嫌いをせず、とりあえずやってみることが重要である。なぜなら、やりたいことと得意なことは必ずしも一致せず、とりあえずやってみることで、今まで感じたことのなかった面白さや得意分野がみえてくることがあるからだ」こういった考え方は、書籍やインターネット上のインタビュー記事で、散見されることではあるが、実際にお会いして生の声でお話を聞くことによって、私たちの中で、より具体化され、取り組みを加速させる。このような学びのチェーンを作ることが出来たという点で、今回の活動は大変意義深いものであると感じている。

また、ゲストの方にどれだけ満足して頂けるかも重要視した。お忙しい中の時間を頂戴してお越しいただいている中で、一分足りとも無駄させてはいけないと考え、運

営上の不備がないか入念に確認した。後輩が企画を運営することがあれば、当日はもちろんのこと、数日前からアドバイスなどを欠かさなかった。ゲストが学生にギブするだけでなく、学生からもギブし、お互いに新たな価値を得られるようにするため全力で取り組む必要があるためだ。さらに、聴講者含めた全員がゲストの経歴や著書、記事から予め質問を用意し、学生側の考えていることや等身大の悩みを伝えた。そうすることで、ゲストは今の学生の考えを知ることが出来、お互いに価値のある時間を送ることが出来た。ゲストの方から「自分が学生の時にこんなゼミがあればよかった」といってもらえることも多く、大変満足度の高いセッションを構築することが出来た。講演後の関係性を大切にすることも意識的に取り組んだ。お礼の連絡をするのは当然であるが、その後個人単位で関係性を深化させ、別日にお会いしたり、企業に訪問したりするなど当日だけに関係を終わらせず、今後社会に出てからも関係性を持てるように心がけた。これらはかつてのOB・OGも行ってきたことであり、各々がチャンスを切り開くための良い機会であるため、今後も継続していこうと考えている。

最後に本活動を通して得た知見を3つにまとめる。

①「継続は力になり、最重要課題である」ということである。仕事で着実に成果を出していくことは、まぐれや運ではないことをあらためて痛感した。どのゲストも、一つ一つ目の前の仕事に丁寧に向き合っている。そうした積み重ねが、大きな成果を生み出している。

②「情熱を持つ」ということ。ゲストの方々全員が今やっている仕事に誇りやプライドを持っているが、どの講演会を取ってもゲストには溢れ出る情熱があった。そうした情熱は必然的に結果を生み出し周りの人間を動かす原動力にもなっているということである。

③「相手目線を貫いた対応」である。どのゲストの方も、学生である私たちからの連絡一つとってみても、丁寧に返信をくださった。また、迅速かつ的確であることも印象に残った。私たち学生はどうしても、友人関係の上で甘えたコミュニケーションをとりがちである。返信が遅れたり、曖昧な態度をとることなどである。本企画を通じて、社会で働く上で大事な働く姿勢を身につけることができた。

この学びはゼミの活動にとどめず、外部でもメンバーそれぞれが将来にわたって活用していけるよう今後も行動していこうと考える。これからの学部の学びをいかし、主体的い動き実践していくことも継続していきたい。